

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

はしがき

著者	小林 致広
雑誌名	神戸市外国語大学外国学研究
巻	72
発行年	2009-03-26
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00000565/



は し が き

本書は「中南米におけるエスニシティ研究班」としては7冊目の報告集であり、おそらく同研究班の最後の報告集となるだろう。中南米の先住民族の権利や自治に関する基本資料の紹介と分析を行なった3冊の報告集のあとは、おもにメソアメリカの先住民族を対象として、文化的多様性の形成や政治的アイデンティティの変動に関する研究成果を公表してきた。「メソアメリカにおける先住民イメージの創出」と題した第7集には6編の論文を収めることができた。

先住民記録者が作成した歴史記録の分析を進めてきた井上の論文は、メキシコ中央高原の先住民社会に関する歴史研究における「新しい文献学」の貢献とその後の米墨における研究動向を紹介したものである。敦賀論文は、エルサルバドル・サンタアナ市カテドラル所蔵の17世紀のピピル語文書「リベラ訓令」の解説を通じて、当時すでに先住民社会でスペイン語の習得が進んでいたことを指摘している。ゲレロ山岳部先住民社会の研究を進めてきた小林貴徳は、メキシコ北西部の巨大農場での季節労働が、ゲレロ山岳部の共同体でコムネロというアイデンティティを堅持するために必要なものとして組み込まれていることを明らかにしている。武田論文は、2007年からの現地調査に基づき、ラディーノ都市から先住民が多数派の都市となったサンクリストバル市におけるペンテコステ派の活動とそれに参加する人々の姿勢について分析している。サパティスタ運動に関する研究を進めてきた柴田は、女性の立場から見た先住民自治に関する議論を整理し、女性の前に広がる選択の幅が広がっていることを指摘する。編者小林は、ベラクルス州政府が組織した文化フェスティバル「クンブレ・タヒン」を対象に、先住民の文化遺産が観光商品として流用されている状況を明らかにしようとした。

本学で1994年から活動してきた「中南米におけるエスニシティ」研究班は、今年度をもって公的には解消することになる。しかし、若手の中南米研究者による研究の進展に即して、その研究成果を発表できる新たなスペースが本学において確保できることを期待したい。

2008年11月

研究班代表 小 林 致 広